

みんなの広場



(題字は千葉理事長)

※右の黒点は、題字と同じ内容を点字で表したものです。



思い出いっぱいあったよ!

～和光学園の夏休み～

7月26日から7月27日、秋田県道川海水浴場
岩城少年自然の家に行ってきました。

「海水浴やキャンプファイヤー、ザリガニつりも
楽しめました!!」

主な内容

- シリーズ「続・精神障がい者への支援」その② … 2
- 岩手県立療育センター相談支援部の業務の紹介 … 3
- 「岩手珈琲物語」(松風園)
新たな挑戦「シイタケ栽培」(さくら) …… 4
- 支えられて15年 たばしね学園 おもちゃ図書館
ケアホーム「ぼらん」2度目の春・夏・秋・冬 … 5
- 笑顔いっぱい 好地荘・松風園 合同夏祭り
業務改善活動の紹介(和光学園)
岩手県立視聴覚障がい者情報センター
「サピエって何?」 …… 6

地域生活におけるネットワークの重要性

相談支援センターさくら

信頼・絆をつなぐ支援

発達障がい児との関わり

みたけ学園

■自己決定を支援
相談支援センターさくらには、地域で暮らす精神障がいを持つ方やその家族から、人間関係、医療、福祉サービスの利用などについて、日々多くの相談が寄せられています。精神障がいといっても病気の種類は様々で、病気の時期、家族の状況などにより、必要とする支援はそれぞれ異なってきます。

地域生活では、医療、移動手段、日中活動の場などを、散在している資源から自分で選んで利用することになり、すが、精神障がいを持つ方の多くは、対人関係が苦手等の障がい特性により、必要な資源の調整に困難さを伴うため、支援が必要だといわれています。

実際にどのような支援を行うかは、ご本人との話し合いにより決めていきますが、大切なのは、ご本人の話を傾け、不安や戸惑いを受け止めながら、「自分でもできそうだ」という方法を一緒に見つけ、必要な資源につなげていくことです。その際には、ご本人の能力に応じて、パンフレットを用いて丁寧に説明したり、見学に一緒に行く等、主体的に自己決定できるように配慮することが求められています。



様々な方法を話し合います

相談支援専門員 高橋 美香子

■ネットワークの拡充で支援の充実を
また、相談場面で詳しい情報提供を行い、他機関を紹介するためにも、医療機関をはじめとする地域の関係機関とのネットワークは欠かせません。ご本人を交えた個別の話し合いの場での情報交換や、協力関係の積み重ねは、精神障がいの方を取り巻くネットワークを少しずつ、しかし確実に広げていくことを実感しています。

今後、地域から期待される役割を果たし、関係機関との連携を深めることで、精神障がいを持つ方の地域生活を支える仕組みづくりにつながるよう努力していきたいと考えています。

岩手県立療育センター相談支援部「地域支援チーム」

地域の支援体制強化をサポート

「どこに生まれても、どの地域で生活していても、安心して生活できる岩手県」を目指しスタートした県立療育センターも、今年度で4年目となりました。同時に、私たち相談支援部としての活動も4年目となります。本誌第102号でも当部の業務を紹介しましたが、今回は「地域支援チーム」の業務を紹介します。

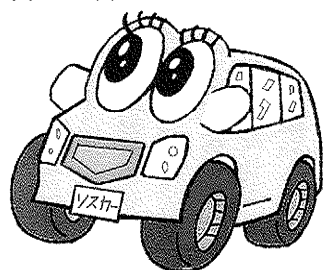
「地域支援チーム」は、県から障がい児等療育支援事業を受託して活動しています。発達相談担当・言語相談担当企画調整担当の計5人で構成され、県内各地で①発達相談支援、②発達支援関係者ミーティング、③市町村事業へのスタッフ派遣・講師派遣、④研修会等の企画、⑤療育教室支援などを展開しています。

発達相談支援

当チームの業務の中で大きな割合を占めるのが「発達相談支援」です。市町村での乳幼児健診や日々の保育等から、支援が必要な子どもについて相談を受け、保護者や保育園等の先生に助言を行います。また、相談を受けるだけでなく、市町村の支援体制をサポートす

ることも大きな目的と

しています。大まかな流れとしては、市町村担当課を通して、相談を受ける方の記録や園での様子等の資料を事前に提出いただき、それをもとに相談を受けます。相談では発達検査等を通じて子どもの様子を確認し、保護者や園の先生に助言します。その後、事後カンファレンスを行い、市町村としてどのように支援していくかを検討します。



〈公用車 ソスカ一号〉
当チームの頼れるマスコットキャラクターです

「発達相談支援」の窓口は保健担当課であったり、あるいは児童福祉担当課、障がい福祉担当課と、市町村によって異なります。また、多くの事業（乳幼児健診や障がい児保育等）が市町村事業として実施されていますので、市町村によつて利用できる資源等が異なります。市町村に応じた助言や提案、他の市町村の取り組みを紹介することも、

■増える発達障がい児、困難な支援
知的障害児施設を利用している子どもたちにも、精神科医療との連携が必要となる子どもたちが増えてきました。その典型が、親の愛情に恵まれなかったり、親などの家族から虐待を受けて、家庭に居場所を失った子どもたちです。中には、このことが原因で、10代半ばにして病名がつけられたケースもあります。彼らには、知的障がいに対する支援が中心ですが、将来的には精神科医療を中心とした支援に重点が移っていくことが考えられます。

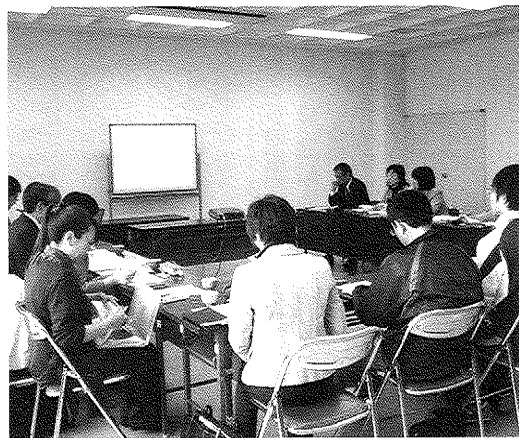
虐待を受けた子どもたちは、基本的に他者との距離感がよくわかっていません。初対面の人にはベタベタとまとわりついたり、本人にはとても大切な人なのに、ちよつとしたことで簡単に相手の神経を逆撫でするような言動や、あえて相手が嫌がる行動をすることは珍しいことではありません。このような子どもたちは、「大切にされている」「見守られている」「心配してくれている」などといった安心感が伝わって、初めて心を開いてくれます。一般的に、信頼関係を築くまでに多くの時間を要します。

模索する支援のあり方

この活動の目的です。
平成19年度の利用は33市町村（県内35市町村中）でしたが、今年度は24市町村（34市町村中）となっています。当チームの発達相談支援を利用しなくても、市町村独自事業として発達相談支援を展開する市町村が増えていきます。また、事後カンファレンスへの参加者も、年々、広がりが見られ、担当課に限らず、保健・福祉・教育の各担当者や園の先生、相談支援専門員、特別支援学校の特別支援教育コーディネーター等の参加も多くなつており、市町村での支援を検討する際に大変有効となっております。

関係者ミーティング

市町村の資源について確認したり、意見交換する機会として、また当チーム

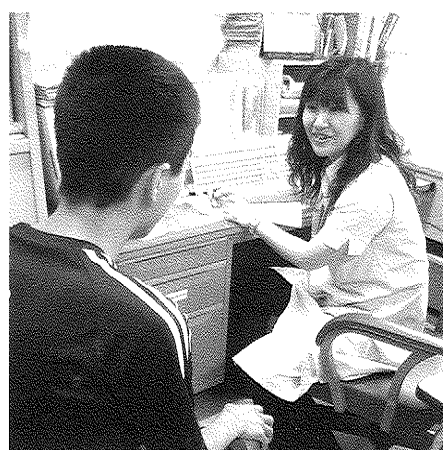


発達支援関係者ミーティングの様子

このほか、広汎性発達障害と診断された方についても、支援困難な状態が続いています。彼らは対人関係の構築が難しく、思いどおりにならないことに苛立つて不適切行動にも発展しがちです。年齢的に卒園までの限られた時間の中で、人とのつながりや社会の仕組み等、生きていく上で基本的なところをどうやって教えていくかが課題です。

最近、10代半ばの児童が初めて利用するケースが多く、そういった難しいタイプの子どもたちを支援していく中で、どう成長につなげていけるか、精神科医療と連携しながら模索中です。

（寮棟主任 氏家 孝二）



カウンセリングの様子

の活動の周知を目的に、年度当初に「発達支援関係者ミーティング」を開催しています。発達相談支援を利用している市町村や、当チームのスタッフを派遣している市町村に限らず、希望する市町村でも開催しており、平成19年度は全市町村、平成22年度は28市町村で実施しています。市町村の保健・福祉教育の担当者や子育て支援センター、療育教室スタッフ、また、相談支援専門員や特別支援学校の特別支援教育コーディネーター等の参加をいただいています。スタート当初は各担当者に集まっていたことが難しい市町村もありましたが、回を重ねることにスムーズになり、どの市町村も連携が深まってきていると感じています。

また、実際に出向くことで知り得たことがたくさんあります。例えば、乳幼児健診について、1歳6カ月児健診・3歳児健診は法律に定められています。が、その他の健診については市町村によつて様々です。保健師の人数も市町村で異なります。療育教室についても、児童デイサービスとして行っているところもあれば、独自事業として行っているところもあり、回数や対象児についても異なります。市町村ごとの実態・実状に見合ったそれぞれの健診・相談・療育支援体制を作ることが大切であることを実感しています。

（相談支援員 榎林 みず穂）

共同開発
松風園
「岩手珈琲物語」



新しい物語をつむぎます

■悲喜こもごもの「物語」

県内の自家焙煎珈琲を製造している7施設共同開発商品、「岩手珈琲物語」が4月に発売されてから半年が経過しようとしています。県知事への商品PR、全国ネットなどTVでの宣伝、奥州市のえさし藤原の郷で開催された「いわて喫茶サミット」、限定版「レインボーパック」販売等の取り組みが影響したのか、発売開始から売り切れが頻発し、生産が追いつかない状況が続きました。1箱に7袋が入っており、自家焙煎珈琲豆を挽いて、ドリッパパックに定められたグラム数を入れるために、利用者が涙ぐましい努力を経て製造しており、生産が追いつかない時は、工賃倍増の喜ばしい表情を浮かべながら、また、納期までに間に合わせなければならぬという、切ない表情が重なって、なんと

もいえない表情で取り組んでいたのを思い出します。

■販路拡大の努力

コスト削減と販路拡大を図るための共同での生産販売は、東北初であり、1施設では困難な商品開発に係る経費が、他の施設と協力して案分することで可能になりました。また、一般企業の商品と肩を並べても引けをとらない商品と感じており、今後の販売形態の幅の拡大も期待できるとしています。今後、地域のお店や企業に委託販売をしていただくことで、収入安定の底上げにつながればと考えています。しかしながら、私たち福祉施設職員も、「岩手珈琲物語」を一般企業に売り込むため、発売翌日から営業マンになり、また社長さんからお知恵をいただきたいこともあり、反対に門前払いを受けることもあり、日々学ばずが沢山ありました。おそろく他の施設でも同じような営業努力を重ねていると思います。

■受け継がれていく「物語」

これからも継続して、委託販売先の拡大、冠婚葬祭の引き出物、全国規模の大会などでの記念品などとしての受注を通し、施設間の共同生産化で大量受注にも加わりながら、一層盛り上げていければと思います。また、受託作業から自主生産の流れの中で、当事業団でも歴史と伝統のある自家焙煎珈琲が私のような若い世代に受け継がれ、この「岩手珈琲物語」の共同開発に加われたことは、私事ではありますが誇りに思います。また今回の取

さくら 旧早池峰寮
新たな挑戦
「シイタケ栽培」

さくらの農産園芸班で栽培しているシイタケは、味にも定評があり、好評をいただいている製品のひとつです。シイタケをめぐる取り組みについて紹介します。

平成19年度の施設再編に伴い、「さくら」では「こぶし」(旧馬淵寮)よりシイタケ栽培作業の一切を委託されたのですが、当時シイタケ栽培のノウハウを持った職員もおらず、収穫と原木の管理に止まっていたところ、翌年度になり、栽培技術を持った職員の転入によって、「さくら」としての、生産から収穫、販売までの現在のシステムが確立されてきました。生産の向上に伴い、シイタケの販路確保として、旧馬淵寮時代に取引のあった「べルプラス沼宮内店」(旧はちや)に収穫したシイタケを納品し、施設の名称をそのままに販売していただいています。また、他施設から大口で買取りいただいたり、

り組みに限らず、施設間の連携を大切に、菓子製造等の新たな共同開発を行います。また、県内外の皆様が福祉施設の商品を見直してもらえよう頑張りたいと思います。

(職業指導員 嵯峨 知義)



真剣に、楽しく取り組んでいます

施設内職員販売を始め、各種イベントでの外部販売や園近隣の産直(里山市場)への納入等も積極的に行っています。現在、利用者6人、職員2人の体制で取り組んでおり、利用者の皆さんは、主に生産工程の原木の移動運搬作業や収穫の手伝い、また冬場の植菌作業(原木に菌駒を植えつける作業)に取り組んでいただいています。年を追う毎に作業の正確さや技術が向上しており、作業活動に対する意欲も向上しているように感じられます。しかし、意欲や技術の向上とは裏腹に、高齢化による作業班メンバーの減少や、作業活動の在り方について検討せざるをえない状況となっており、現在の課題となっています。それでも、「原木は生きています」利用者さんの意欲が続く限り、その期待に応えられるよう、これからも前向きにシイタケの生産と販売に取り組んでいきたいと思っています。

(生活支援員 紺野 真)

ケアホーム「ほらん」
2度目の春・夏・秋・冬

■地域生活の定着

平成21年4月に、共同生活事業所「オリザ」が開所し、ケアホーム「ほらん」の地域生活が始まりました。6人の入居者は、世話人と生活支援員の支援を受けながら、2度目の夏を過ごしています。月曜日から金曜日は、やさわの園「ジョバンニ」(生活介護)に通い、利用者それぞれに「朝ご飯を食べたら、仕事に行き、夕方になったら帰ってくる」という生活スタイルが定着しました。夕方や週末は、自分の部屋でくつろいで過ごす人、リビングでテレビを見ている人、手芸をする人、世話人や支援員に関わりを求め人など、思い思いの過ごし方をしています。生活支援員が2人配置されていますので、週末はドライブや外食、余暇活動など、希望に沿った活動を行うことができます。

スチャーターでコミュニケーションが可能な場合には、本人の希望を知ることができ、多くの利用者は支援者が本人の表情、その時の様子から汲み取る事が大切で、家族の希望も聞きながら、施設入所中では難しかったサービスを提供するように工夫しています。

利用者や世話人の関係もお互いが慣れてきて、ケアホームが安心して生活できる場になっていると感じられます。今年の夏は暑かったので、就床前に部屋を回って水分の提供をしていましたが、寝る前の世話人と利用者の心温まるやりとりも続いているようです。これからどんな秋と冬を迎えるのでしょうか。今からとても楽しみです。

(サービス管理責任者 及川 友枝)

支えられて15年

たばしね学園 おもちゃ図書館

■おもちゃを通して成長

たばしね学園おもちゃ図書館は、平成7年に開設しました。今まで多くのボランティアの方々に支えられ、今年で15年目になりました。

おもちゃ図書館とは、もともとは、障がいのある子どもたちが、おもちゃを通して楽しく遊ぶようにとの願いから始まったボランティア活動です。当学園のおもちゃ図書館も障がいを持った子どもや、地域の子どもたちの交流の場、遊びを通じた成長の場として広く利用していただいています。

■おもちゃ病院や手作りおもちゃ教室も

おもちゃ図書館開設に続き、おもちゃ病院も設置し、地域の方々に留まらず、インターネットを通じて県内の方々の依頼(おもちゃの修理)も受けております。

おもちゃ図書館の目玉企画としては、年に1〜2回の手作りおもちゃ教室があります。身近な材料を用いて、おもちゃをボランティアと二緒に作成し、遊ぶ催し物です。

ここ数年は、ジャスコ前沢店さんの協力を得て、夏の手作りおもちゃ教室はジャスコ店内で行っ



手作りおもちゃ教室の様子

ております。今年8月1日(日)に開催しました。今回はおもちゃドクター考案のおもちゃをみんなで作成し、参加者の方々と楽しみました。今回参加したボランティアの中には、今年初めて参加した人もあり、ベテランボランティアの助言を受けながら作業し、時間の経過と共に表情が和らぎ、最後には、積極的に子どもたちと関わっていました。おもちゃ教室では、私たち関わる側も様々な勉強をさせてもらっています。毎週土曜日の10時から15時まで開館しておりますので、お近くにいらした際は是非遊びにいらして下さい。ボランティアさんと共にお待ちしております。

(保育士 土田 智栄)

さらなる充実を目指して
利用者のニーズについては、言葉やジェス



参議院選挙で投票を行いました

笑顔いっぱい

好地荘・松風園合同夏まつり

長かった夏の思い出を彩る、好地荘・松風園の合同夏まつりの様子をご紹介します。



7月31日に、好地荘・松風園合同夏まつりが開催されました。昨年は雨天により、体育館での開催となりましたが、今年には恵まれ、グラウンドで行うことができました。

今年の夏まつりのメインイベントは、北上市出身のマンドリンシンガー、清心さんのミニコンサートです。清心さんは「手と手」等オリジナル曲を4曲歌ってください、清心さんの澄んだ歌声とマンドリンの音色に感銘を受けました。

最後のアンコールでは、清心さんがステージを降りて、観客の皆さんと一緒に「ふるさと」を歌ってくださいました。清心さんと一緒に歌った好地荘のNさんは、「来年も来てほしい」と話していました。清心さんのミニコンサートの他にも、北上市の「ピエロの会」の方々が、ステージでバルーンアートを披露してください、子ども達にも大人気でした。

まつりの
ファイナレは、
盆踊りと2
年分の火花
で、地域の子



笑顔が素敵な清心さんです

ども達も、施設の利用者の皆さんも、たいへん盛り上がりました。

来年も楽しい企画を考えてまいりますので、是非夏まつりにいらしてください。お待ちしております。

(好地荘
生活指導員
岡野 彩子)



「ピエロの会」の皆さんに大盛り上がりでした

業務改善活動の紹介

和光学園「施設内暴力の解決に向けた安全委員会の取り組み」

現在、全国の児童養護施設では、暴力の問題が後を絶ちません。和光学園でも、その対応の難しさから職員が疲弊している現状でした。

当園では、この問題を解決し、子どもたちが安心・安全な生活を送ることを目的に、「安全委員会」を立ち上げました。安全委員会とは、九州大学大学院の田嶋教授が施設内暴力を解決するために

考案したシステムアプローチです。

施設内暴力の問題は、個々の力での解決が難しいうえ、問題が見えにくい場合があり、また、重大な問題であるにも関わらず、施設内部だけで解決しがちです。これに対して、安全委員会は、外部の第三者を入れた形で、システムとして取り組んだことに特徴があります。現在、和光学園では、子どもたちも暴力に対して意識をして生活し、深刻な暴力はみられなくなりました。

安全委員会システムの特徴

施設内部だけでなく、児童相談所や学校関係者、地域の方々等の外部の関係者を入れた形で構成する。

2 安全委員会で扱う暴力

基本的に、力関係に差のある身体的暴力を扱う。児童間、児童から職員、職員から児童の3つの暴力を扱う。

3 安全委員会での対応

暴力の深刻性、再現性、全体への影響度により、①嚴重注意、②特別日課、③一時保護、④退園の4つの措置がある。子どもたち自身にも分かりやすい一貫したルールを示し、そのルールに基づいて一貫した強力な抑えを実行していくのが特徴。また、その対応については、外部委員も含めて審議し、園長へ勧告する。

4 暴力を非暴力で抑える

生活の中で、子どもたちに「暴力はダメ、叩くな、口で言え」を徹底して教え、暴力に替わる別な方法を教える。

5 成長のエネルギーを引き出す

安心・安全な生活を基盤にしながら、今度は子どもたちの成長のエネルギーを引き出す。

*安全委員会が暴力をなくするのではなく、職員が子ども達に向き合い、それを応援する仕組みが安全委員会です。

(児童指導員 藤森 祐司)

「サピエ」ってなに？ 岩手県立視聴覚障がい者情報センター

世の中は、まさにIT時代。パソコンひとつでどんな情報も得られる便利な時代です。視覚障がい者の読書環境も例外ではありません。インターネットで図書資料を検索したり、貸出し依頼をしたり。そして、今年4月から図書の音声データもダウンロードできるようになりました。視覚障がい者の読書を支援するネットワークシステム、それが「サピエ図書館」です。

「サピエ」は、全国の点字図書館や公共図書館、ボランティア団体等約205の施設と個人会員約6千人が登録し、書誌データベースは約47万件を保有しています。読みたい時に読みたい本を自由に選ぶ！視覚障がい者のIT利用は、これからますます発展していくことでしょう。それを支援していくことが私達の役割…と考えています。

(主任情報支援員 庄司 智子)